

日本近代文学大事典

机上版

日本近代文学館編

講談社

日本近代文学大事典

机上版

日本近代文学館編

講談社

日本近代文学大事典 机上版

昭和五九年一〇月二四日 第二刷 発行

編者 日本近代文学館 小田切進

発行者 野間惟道

発行所 株式会社 講談社

住所 東京都文京区音羽二二二二

郵便番号 一一一

電話 東京(〇三)九四五 一一一(大

代表) 振替 東京八一三九二〇

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 大製株式会社

定価 一一、〇〇〇円

©日本近代文学館 九八四 Printed in Japan

落丁本・乱丁本は当社書籍製作部あてにお送りください。送料当社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-06 200927-7(0) (文芸)

『日本近代文学大事典』机上版の刊行にさいして

この事典は先に日本近代文学館の創立一五周年、講談社の創立七〇周年を記念して刊行した『日本近代文学大事典』全六巻中の、第一巻から第三巻までの人名の部三巻分をそのまますべてあわせて収め、それに全六巻版刊行後の日本現代文学の新たな動向を、ジャンルごとに、またティピカルな問題別に約三〇篇の新稿によって補い、さらにカラーアルバム、文学資料アルバム、便覧・案内、年表などを加えて全一卷に編んだものです。右の『大事典』中の三巻に収載された人名項目数は五一七二だったので、今般、新稿の本文中に補充した約四六〇名を併せると、実に五千六百余名に及び、本事典のきわだった特色をなしています。これまでの近代文学事典中最も詳細なものが、人名項目数一七〇〇だったことを考えると、この机上版の収載人名数およそ五六〇〇は、特筆さるべきことと言わなければなりません。

また机上版では六巻版の誤り、不備な箇所を正し、参考文献を除いて、昭和五九年五月までに出版された個人全集及び著作集など四百余りを新たに補い、基本的な文献の書誌としても役だつよう配慮しました。

このような『日本近代文学大事典』六巻版の縮冊ともいうべき机上版の刊行は、昭和五三年三月に六巻版が完結する前後から、今日にいたるまで、非常に多くの方たちから要望が寄せられてきたものです。幸い、六巻版はわが国近代文学研究の多年にわたる研究成果を全面的にとりいれ、かつて全くなかったスケールの大きな近代文学事典として圧倒的な好評を得ました。しかし六巻を併せると総ページ数三三三二に達する大冊となったため、縮冊版、机上版、学生版を熱望する声が多数寄せられるにいたったのです。いらい館と講談社は慎重な協議と準備をたびか

さねた末、ここに右のような形で机上版を編集・刊行することになりました。

なお六巻版は稲垣達郎（委員長）、井上靖、太田三郎、奥野健男、木俣修、楠本憲吉、紅野敏郎（編集長）、塩田良平、瀬沼茂樹、中島健蔵、中村真一郎、中村光夫、成瀬正勝、野口富士男、平野謙、福田清人、舟橋聖一、保昌正夫、三好行雄、山本健吉、吉田精一、和田芳恵氏をはじめとする館の全理事が編集委員となって編纂されましたが、今般の机上版は稲垣（委員長）、瀬沼、紅野、保昌の諸氏が補訂の作業にあたられたことを記し、感謝の意を表します。

また人名執筆者総数七七二名にのぼる方々、机上版刊行にさいし新たに寄稿くださった三〇氏、講談社の関係各位に厚くお礼申し上げます。

これまで『日本近代文学大事典』六巻版ほど多数関係者の協力を必要不可欠とした出版物は、「大百科事典」のような特別なものを除けば、他に類をみないものと言われましたが、今回の机上版の刊行によって、更にいっそう多くの方々にこの画期の大事典を利用していただけることになれば多数関係者の協力が報われることになると思います。

昭和五九年七月

財団法人日本近代文学館

理事長 小田切 進

『日本近代文学大事典』刊行の辞

明治いらいの日本近代文学は、すでに一世紀をこえる歴史を経てきました。この間に、日本文学は伝統文学を承け継ぎつつ、西欧文化からさまざまな多くのものを摂取・吸収し、紆余曲折をたどりながら、多様、多彩な、日本独自の文学を創り、同時にまた世界に比肩し得る文学ともなったのであります。現代が、日本文学の長い歴史をつうじて、この豊饒の時代から、最も学ぶべきことが多いのは、改めて言うまでもありません。

ところが、早くから学問的な多くの業績がかさねられてきた古典の研究に比して、近代文学のそれは少数の先駆者たちの貴重な労作があつたにもかかわらず、いちじるしく立ち遅れ、ほとんど未開拓のままとなっていたと言っても過言ではありません。

戦後、日本と日本人の新たなありかたが改めて問われると、先ず明治いらいの日本の近代の再検討・近代の文化の再評価が、きわめて大きな、重要な課題となり、いらいどの学問の分野においてもすぐれた研究成果が次々に挙げられてきました。とりわけ近代文学にたいする関心は、戦後の日本文学の未曾有の発展もあつて高まり、作家・作品・文学史研究の各領域にわたって、おびただしい収穫が相次いで生まれ、戦前の水準とは比較にならぬところへ進みでたのであります。そうした機運のもとで、散逸・湮滅のはなはだしい関連資料を、広く収集し、後世に伝えるべく、昭和三七年、文壇・学界の有志二百四十余名によって近代文学館設立の運動がおこり、各界からの援助を得て、世界にも他に類のない近代文学のミュージアム（図書館・博物館）が実現されました。

ここによりやく完成、刊行をみることになった『日本近代文学大事典』全六巻は、近代文学館の設立に大きな寄

与をされた講談社社長野間省一氏の熱心な薦めによって、昭和四六年、館の創立一〇周年を記念する事業として着手し、いろいろ文壇・学界の三〇名から成る編集委員会が二十数次にわたる協議を重ね、歴史・社会・哲学・思想・美術・演劇・映画・出版・新聞など関連領域をふくむ執筆者八六〇名、関係者スタッフの総数あわせて九〇〇名に及ぶ多数の方々の協力を得て、今日までの研究成果のすべてをとり入れ、館がこの一五年間に収蔵するにいたった貴重な諸資料を生かし、六年をついやして成ったきわめてスケールの大きな文学事典であります。この間に、本事典の企画立案の中心となり、推進力ともなつて、重要な役割をはたした塩田良平、舟橋聖一、成瀬正勝、太田三郎の諸氏が編纂なかばにして物故されたことは、私たちの深い悲しみです。

館の創立一五周年、講談社の創立七〇周年を記念する出版として、このような、かつて全く企てられることのない、かつた並々ならぬ事業が、講談社をはじめ、多くの図書館・資料室、編集委員、執筆者、そのほかの関係者の熱意によつて実現されるにいたつたことを、深く感謝し、ここにお礼を申し述べるとともに、大事典の完成を見ずに亡くなられた編集委員諸氏に、あらためて哀悼の意を表します。

本書が明日の日本文化の発展に役だてられることを心から願つてやみません。

昭和五二年九月

財団法人日本近代文学館

理事長 小田切 進

天沢退二郎	阿部正路	阿部文勇	安部宙之介	阿部昭康	足立康	安住敦	飛鳥井雅道	浅野洋	浅井清	芥川比呂志	秋山駿	秋山虔	秋山清	秋庭太郎	阿木翁助	赤間昇	赤瀬雅子	明石利代	青山なを	青柳正広	青地慶	青木信雄	青木生子	青江舜二郎	響庭孝男	相原和邦
石井洋詩	石井昌光	石井和夫	伊沢元美	池田弥三郎	池田不二子	池上浩人	池内輝雄	生松敬三	井口一男	井田幸平	伊田龍章	飯島小太	飯倉照平	安藤信彦	安堂信也	安東璋二	安西勝植	新谷敬三郎	荒垣秀雄	鮎川信義	網野義紘	天野茂				
井上武士	稲垣三吉	稲垣真美	稲垣達郎	絲屋史生	伊藤成彦	伊藤ていじ	伊藤信吉	伊藤逸夫	逸見久美	市川為雄	市川一男	伊丹三樹彦	板垣弘信	板垣光一	磯田英夫	磯貝勝太郎	和泉あき彦	伊豆利彦	石割久透	石丸八束	石原等	石崎昌弘	石倉治弘	石川喬司	石川桂郎	
内川芳美	白井吉子	牛山百合子	上村占魚	植田康夫	上田三四二	上田正行	植田敏郎	植田重雄	宇井英俊	巖谷大四郎	岩淵悦太郎	岩津資雄	岩佐壯四郎	岩崎吉一	入沢康夫	入江隆則	井村君江	今村忠純	今尾哲也	今井信雄	茨木謙二	猪野謙二	井上百合子	井上宗靖	井上英明	
太田文平	太田登一	太田青丘	太田三郎	大武正人	大竹健介	大沢正道	大河内昭爾	大久保利謙	大久保典夫	大木豊	大岡昇平	大江良三郎	大内三郎	大屋幸世	大矢根文次郎	遠藤忠祐	遠藤周作	海老井英次	榎本隆司	江刺昭子	江川卓造	江頭彦造	瓜生鉄二	瓜生忠夫	浦西義方	宇野道雄
荻久保泰幸	小川環樹	小川武敏	小川国夫	小川和佑	岡本卓治	岡野他家夫	岡庭昇	岡田純也	岡田義男	尾形明子	小笠原克	岡一男	大屋幸世	大矢根文次郎	大森澄雄	大村喜吉	大藤幹夫	大橋健三郎	大野林火	大西民子	大津山国夫	大塚雅彦	大塚博	太田雅夫	太田雅夫	
榎葉勇	梶原伸剛	笠井秋生	笠井真悦	風穴鉄郎	陰田敏郎	角田旅人	香川進	甲斐知恵子	恩田逸夫	小原元	小野寺凡	小野忠重	小沼勝美	乙骨明夫	越智治彦	落合清彦	小田切秀雄	小田切進	小山内時雄	長崎秀弘	尾崎宏次	尾崎秀昭	桶倉健三	奥野健男	奥田弘要	興津要
川崎淳之助	川口倫明	河北一夫	河合靖峯	河合道雄	柄谷行人	唐沢柳三	唐井清六	萱原宏一	亀井秀雄	亀井俊介	神谷忠孝	上木敏郎	鎌倉恵子	嘉部嘉隆	鹿野政直	加納一朗	金子昌夫	金川光夫	門田守穰	加藤謙一	加藤克巳	桂山信功	勝見勝	勝見勝	加太こうじ	片岡英郎

木下順二	吉川英史	木谷喜美枝	北島秀明	北岸佑吉	来嶋靖生	菊地弘明	菊池茂男	鎌原正巳	菅野昭正	菅忠道	神田孝夫	神崎清藏	神崎好藏	河盛茂雄	川本三郎	河村政敏	川村二郎	川西欽吾	河竹登志夫	川副国基	川島順平	川嶋至洋	川崎宏	川崎展	川崎宏			
桑原武夫	黒田三郎	黒山理章	栗原秀江	栗林良樹	栗坪靖躬	栗田直健	倉橋謙次郎	隈元謙次郎	熊坂敦子	熊倉功夫	久保田芳太郎	久保田正文	窪田般弥	窪田章一郎	国岡彬一	楠本憲吉	清原康正	清崎敏郎	清岡卓行	木村幸雄	木村壽子	木村捨録	木村久遇典	木村毅新	木原直彦	木原孝一		
近藤信行	權田萬治	古来侃	小松伸六	駒尺喜美	小林正夫	小林茂修	小林一郎	小西正保	後藤明生	後藤昭次	小玉見一	小瀬千恵子	小瀬信夫	小島軍司	小坂晋実	小久保文	後神俊二	弘法春見	紅野敏郎	香西照雄	香内信三	香内三郎	小泉浩一郎	剣持武彦	郡司正勝			
佐藤善也	佐藤泰正	佐藤房儀	佐藤忠男	佐藤健一郎	佐藤喜和	佐藤多稲子	笹淵友一	佐佐木幸綱	佐々木靖章	佐々木充	佐々木雅発	佐々木徹	佐々木啓一	佐々木基一	桜井国隆	桜井克明	鷺本政親	坂本美弘	柳上博一	坂上博一	酒井森之介	酒井道夫	境忠一	佐伯彰一	斎藤壽始子	近藤芳美		
杉崎俊夫	菅井幸雄	新間進一	神保五弥	新宮嘉章	神宮輝夫	白井浩司	白井誠一	庄野潤三	首藤基澄	清水芳雄	清水房雄	清水茂	清水和	島田二郎	嶋田厚	嶋田昭秋	淡谷定輔	淡沢孝輔	淡川光彦	柴田一士	篠田隆	品川力三	司代隆三	重松泰雄	志賀信夫	三瓶政一朗	沢木欣一	佐藤芳幸
高木文雄	高井有一	大悟法利雄	祖父江昭二	園部一雄	曾根博義	相馬庸一郎	相馬文子	相馬茂樹	瀬戸慶久	瀬戸内晴美	関口英一	関口安義	関口篤男	関口光男	関口光男	関口光男	関口光男	関口光男	関口光男	関口光男	関口光男	関口光男	関口光男	関口光男	関口光男	関口光男	関口光男	関口光男
田沢英蔵	竹盛天雄	竹西寛子	竹田日出夫	武田友寿	武田清彦	武田勝夫	匠井秀夫	滝藤満義	田川飛旅子	高谷道男	高山亮二	高柳重信	高見堅志郎	高松敏男	高松二男	高松二男	高松二男	高松二男	高松二男	高松二男	高松二男	高松二男	高松二男	高松二男	高松二男	高松二男	高松二男	高松二男
槌田満文	津田久義	都築義郎	辻田美佐子	辻田美佐子	辻田美佐子	辻田美佐子	辻田美佐子	辻田美佐子	辻田美佐子	辻田美佐子	辻田美佐子	辻田美佐子	辻田美佐子	辻田美佐子	辻田美佐子	辻田美佐子	辻田美佐子	辻田美佐子	辻田美佐子	辻田美佐子	辻田美佐子	辻田美佐子	辻田美佐子	辻田美佐子	辻田美佐子	辻田美佐子	辻田美佐子	辻田美佐子

中田耕治	中島健藏	中島國彦	長島河太郎	長沢美津	長崎道雄	永井道雄	中井二太郎	十和田操	鳥越信	豐田都峰	友代三	富山秀男	富田博之	富田仁	倉幸一	土佐亨	登川直樹	十川信介	東郷克美	戸板康二	暁康隆	寺嶋武夫	寺嶋透	手塚昌行	手塚英孝	鶴見俊輔	坪野哲久	屋悅郎
西本鶏介	西村博子	西田長勝	西沢正彦	西川道子	西垣幹勤	新尾正彰	新妻正彰	成田孝昭	滑川道夫	中山和子	中村稔	中村光夫	中村英雄	中村溪男	中村真一郎	中村純一	中村浩三	中村潔	中村完	永平雄	長野菅一	中野重治	中野菊夫	中野嘉一	中西芳絵	永塚功雄	長田幹雄	中谷孝雄
浜野卓也	馬場あき子	埴谷雄高	羽鳥徹哉	畑有吾	畑谷東夷	長谷川龍生	長谷川尚泉	橋本喜典	橋本迪夫	橋本德寿	橋詰静子	芳賀徹正	野山嘉喬	野村尚吾	野村間宏	延広真治	野中涼	野田宇太郎	野口富士男	野口武彦	根津憲三	布川角左衛門	丹羽康碩	二宮敬	蟻川義之	西川義之	林京平	林四郎
平山城児	平松幹夫	平林謙一	平野文也	平田拾穂	平田次三郎	平川祐弘	平岡敏昇	平岡篤頼	樋野芳夫	日下令光	飛高隆夫	日高昭透	菱沼善夫	久富貢	東富牧雄	日笠祐二	伴名徹	春生一郎	針卓也	原一朗	原崎孝	原邦良	原久賀男	福田清人	福田タマ彦	廣野晴彦	法橋謙一	三浦阿き子
八角真	保昌正夫	星野慎一	分銅惇作	古田足日	古田紹欽	古川清彦	布野栄一	舟橋聖一	船津富彦	藤原正晴	富士田元彦	藤田福洋	藤田主雄	藤田龍雄	藤田宏幸	藤岡武雄	藤枝静男	福田淑禎	福田陸太郎	福田宏年	福田宏子	福田光治	堀久賀男	堀切利高	堀江信男	三浦雅士	三浦阿き子	三浦阿き子
丸谷才一	真鍋元之	松山文雄	松本鶴平	松本和夫	松村達雄	松原新一	松永昌三	松田伍一	松島栄一	松崎鉄之介	真繼伸彦	松枝茂夫	松浦幸玲	松井利彦	町田栄	横林晃二	前田登美	前田愛	前田康	本多浩	本多秋五	堀切利高	堀江信男	三浦雅士	三浦阿き子	三浦阿き子	三浦阿き子	三浦阿き子
村松定孝	村松暎	村田邦夫	村田凡人	村上信彦	村上智雅子	虫明亜呂無	武蔵野次郎	向川幹雄	武川忠一	三好行雄	宮本阿伎	宮城達郎	宮岸泰治	宮川寅雄	宮内豊	峯村文根	源高根	満田郁夫	光岡良二	三田英彬	三谷昭	水藤春夫	水谷昭夫	水尾比呂志	三浦雅士	三浦阿き子	三浦阿き子	三浦阿き子
山崎八郎	山崎敏夫	山崎一類	矢部彰	柳富子	柳通博	安田保雄	安田武	矢代静一	薬師寺章明	八木義徳	柳生四郎	森山重雄	森山修	森秀男	盛田嘉徳	森田澄雄	森久保仙太郎	森川平八	森川達也	森英一	森伊佐夫	本林勝夫	室岡和子	村山吉広	村山古郎	村山古郎	村山古郎	村山古郎

吉田 孚
吉田 正
吉野 昌夫
与田 準一
米田 利昭
利沢 利夫
和田 謙吾
和田 繁二郎
渡辺 一民
渡辺 外喜二郎
渡辺 澄子
渡辺 保
渡辺 広士
渡辺 誠
渡辺 正彦
渡部 芳紀
和田 芳惠

阿川弘之
今村守利
入江泰吉
大竹新助
小田切進
柿沼和夫
加倉田信也
坂口綱男
佐藤壽男
杉村恒
高村規
田村茂
野上透
講談社写真部
同 文芸局
文芸春秋
每日新聞社
日本近代文學館

凡 例

本書の構成について

本書は、昭和五二年から五三年へかけて刊行した『日本近代文学大事典』全六巻中の、人名項目をすべて収録した。すなわち明治から現代にいたる各時代の小説、評論、戯曲、詩、短歌、俳句、近代文学研究のほか、思想、哲学、歴史、美術（装幀、挿画を含む）、演劇、映画、新聞、出版等の各界に活躍した人々を収め、明治初年まで生存した文人等もふくめた。

六巻版刊行以降の現代文学状況、主要作家、作品などについては、小説、評論、戯曲、詩、短歌、俳句等各部門ごとに新たな項を設けた。

ほかに「近代の新聞・雑誌」「文学便覧・案内」「近代文学略年表」「リテラリー・フォーラム」等を設けた。

二、人名項目について

本文は六巻版のままを原則としたが、連載中・刊行中などを示す年月の記述には、完結年月を補った。

六巻版刊行時不詳だった生没年月日で、判明した七十数名を補った。さらに、刊行時以降の死没者四百七十数名の没年月日も補った。この下限は昭和五九年六月末日とし、それ以降の死没者は、可能な範囲で巻末に収めた。

ちなみに、明治五年以前出生の主要な二十数名は、旧暦生年月日と新暦に換算した生年月日を併記した。

(例) 坪内逍遙 ひょうよう 安政六・五・二二、新暦六・二二、昭和一〇・二・二八(1895~1936)……。

田山花袋 はなふく 明治四・一二・一三、新暦五・一・二二、昭和五・五・一三(1871~1930)……。

六巻版刊行以降発刊された個人全集およびそれに準ずる著作集等は*印をつけて項目末に補った。この下限は昭和五九年五月末日とした。

(例) *『中江兆民全集』全一五巻(昭和五八) 岩波書店

〈見出しについて〉

○人名は、姓名をゴシック体であらわした。ただし、かたかなの外国人名は原則として姓のみとした。

○ひらがな、かたかなで表記している人は姓と名の間に黒マル(・)をいれた。

○筆名で知られている人は、主として筆名で表記した。

○外国人名は、できる限り原語に近い読み方にしたがった。ただし、ヴェルハレーンなど慣用の定着している若干のものについてはそれにしたがった。

〈配列について〉

○見出し項目(ゴシック体)の配列は、現代かなづかいによる五十音順(清音、濁音、半濁音の順、同音の場合はかたかな、ひらがな、漢字の順)とし、音引きは音順にいれなかった。

○同音のものは生年月日順とした。

○五十音見出しは区切りごとに改段とした。

〈表記について〉

○解説は常用漢字、現代かなづかいとし、必要と認めた場合は常用漢字以外のものも用いた。ゴシック体見出し語のうち「学」と「芸」はそれぞれ「學」と「藝」とした。なお、引用文のかなづかいは原文にしたがった。

○数字は漢数字をつかい、十百千万の単位語を省略した。ただし本文中、十代、数百人といった場合はこの限りではない。

(例) 昭和二五年一〇月、三二歳のとき……。

〈作品およびその年代について〉

○作品の角書きはできるだけ採用した。

○作品には、カッコ内()に発表紙誌、発表年月、もしくは刊行年月、発行所を記載したが、省略したものもある。

○別立て作品については、当該項目経歴部分のあとにゴシック体で示し、原則として初出紙誌、初出年月、ならびに単行本刊行の年月、発行所を記載した。

○単行本題名の表記は、原則として原本の内題にしたがった。写真の題名表記と異同のある場合もある。

〈記号について〉

○書名、作品名は『』を、新聞、雑誌、引用文などは「」を用いた。

○文中に引用された詩に使用した／＼(斜線)は改行を示

し、／＼(二重斜線)は原則として「一行アキ」またはそれ以上の「アキ」を示す。

一、そのほかの項目について

人名項目以外は、いわゆる大項目である。表記、記号等については、人名項目とは必ずしも一様ではない。執筆者の創意性に俟つところが多い。

目次

『日本近代文学大事典』机出版の刊行にさいして 小田切進 (1)

『日本近代文学大事典』刊行の辞 小田切進 (3)

人名項目 あゝわ 3

現代文学 1623 (現代文学人名一覽 1697)

小説||昭和五〇年代の文学

エンターテインメント||文学のマスコミ化

評論||世代の交替と批評の多元化

詩||現代詩の十年

短歌||短歌の現況

俳句||俳句の十年間

戯曲||戯曲十年私史

児童文学||児童文学十年の歩み

ノンフィクション||ノンフィクションの誕生

文学研究||文学研究の十年

日本近代の新聞・雑誌 1701

明治の新聞・雑誌

大正の雑誌

昭和(戦前・戦中)の雑誌

昭和(戦後・現代)の雑誌

文学便覧・案内 1721

文学賞・その種類と性格

主要文学賞一覽

磯田 光一

尾崎 秀樹

佐伯 彰一

大岡 信

上田三四二

村山 古郷

渡辺 保

西本 鶏介

春名 徹

三好 行雄

稲垣 達郎

紅野 敏郎

小田切 進

保昌 正夫

瀬沼 茂樹

編集部 編

日本の文学館・記念館

日本近代文学略年表 小田切進編

リテラリー・フォーラム

1805

1743

マイナーが影響を持つ時代

国語問題

サルトルからマルケスまで

一九八〇年代の中心

核状況下の文学

“大学紛争”と新世代

文学者二世・三世

ヴィジュアル文化の隆盛

“軽薄短小”の時代

女流文学の時代

批評の“新しい波”

在日朝鮮人文学

ノンフィクション作家の輩出

エンターテインメントの新傾向

スペース・オペラとニューウェーブと近未来

ミステリー・ブームの背景

松川・チャタレイ・サド・四畳半

戦後の論争

文学者忌

昭和五九年七月以降の死没者

1837

あとがき 稲垣達郎

1839

小田切 進

川本 三郎

丸谷 才一

篠田 一士

奥野 健男

川西 政明

三浦 雅士

巖谷 大四

川本 三郎

前田 愛

川西 政明

三浦 雅士

川西 政明

植田 康夫

武蔵野次郎

山野 浩一

権田 萬治

小笠原 克

古林 尚

巖谷 大四

日本近代文学大事典

机上版